ある忍恋

一

三月初旬。
気温は漸く十度を超え、早咲きの水仙がひとつふたつ、中庭で小さな花をつけていた。
カミュ・ルーファス・バーロウは、リブ・ヴォールトのくすんだ灰色の天井で支えられた渡り廊下を、ラテン語の教科書を片手に歩いていた。
ゆっくりとしたその歩みは、未だ癒えていない右足を庇って少しぎこちない。
少し年長の集団が通りかかり、せわしない足音を立てて、カミュの隣を通りすぎていく。
"Good morning, lady!"
小さな呼びかけがカミュの耳を打ち、カミュは一瞬背筋を凍らせてその場に立ち止まった。
誰が放ったのか、カミュより頭一つはゆうに大きい集団の後ろ姿から、それを判別する術はない。
見覚えのある数人は、スミスハウスの上級生に見える。だが他は、他寮の人間だ。
カミュは口を真一文字に引き結び、再び顔を上げて歩き始めた。

二月最後の金曜日に行われたダンス大会は、スミスハウスのほぼ全員にとって、予想外に最悪の結果で終わった。
期待が大きければその分だけ、裏切られた時の落差は激しい。
団体成績で二位につけた時、スミスハウスの観客席は歓声に沸き、誰もが上位三位入賞を確信した。
代表戦のペアはダグラス・コックスとカミュ・バーロウ、見栄えはローズハウスのペアほど華やかではないものの、二人共真面目でよく練習している。上位入賞は間違いないと、皆信じていたからだ。
だが、その大切な舞台で、カミュは足を捻挫し、試合は棄権となった。
代表の中でも群を抜いて優雅な演舞を見せていたペアの退場に、審査員達は揃って失意の溜息をついたが、試合の規定を変える事は出来ない。
例年になく団体戦が競っていたこともあり、評価無しで追加点のなかったスミスハウスは、結局総合で六位に転落した。
不運な事故だったと、誰もが、そう嘆いて惜しんだ。何事もなく最後まで踊れていれば、間違いなく一位だった、と。
少なくとも大会終了直後には、皆代表二人の努力を素直に認めていたのだ。
だが、週末が開けて三月最初の月曜日、カミュ・ルーファス・バーロウは己の周りで何かが変わりつつある事に気付いた。

「聞いたか？　あいつ、練習のしすぎで、最初から足痛めてたんだってよ？」
「ほんとかよ？」
「なんでも、ハイヒールで血豆作ってたらしい。で、それが破れて怯んだ瞬間に足挫いたんだと」
「まじかよ……本番コケたら意味ないだろ……ってか、たかがダンスで普通そこまで練習するか？」
「俺だったらやらないね。そもそも、女装して踊るなんて絶対御免だしな」
「俺もだ。あんなのにわざわざ立候補する奴の気が知れない」
「そこだよ、そこ。あいつ、Upper Sixが圧倒的多数でミロ・フェアファックスを指名したってのに、自分から立候補したんだからな」
「フェアファックスが嫌がってたから助け舟を出した、と専らの噂だったが、あの気合いの入り方はそれだけじゃない感じだったよな。ドレスもやたら似合ってたし……」
「ああ……なんかな。ダグラス先輩に気があるんじゃないかって、他の寮では噂になってるらしいぜ」
「そりゃ、先輩はいい迷惑だな（笑）」

聞くつもりのない事ほど耳に入り、聞かせるつもりのない言葉ほど遠く迄届く。

カミュがその会話を耳に挟んだのは、全くの偶然だった。その時間、第四学年はＧＣＳＥ模試の結果についてのオリエンテーションがあったから、本来なら同級生と共に講堂にいた筈だったのだ。たまたま、休み時間にハウスマスターに呼ばれ、足の具合などの質問を受けていて五分遅れた。急ごうにも右足の痛みで走れず、講堂へ向かって歩いていた時に、折しも吹いてきた向かい風のせいで、前を歩いている一級上の学生の雑談が聞こえたのだ。

噂をしていた当人達に、これといって悪意があったわけではない。

だが、カミュに対する、本人が想像もしていなかった憶測は、カミュの背筋を凍らせ、その自由な呼吸を止めた。

本番に怪我をするなどという、あまりにも初歩的な失敗を犯した。

全く舞台慣れしていない子供でもあるまいし、そこそこ合唱で大きな舞台も踏んでいる自分が、一体何をやっているのか。

無理に続けようとしたのをグラハム・コックスに厳しい表情で止められた時、そんな我が身に怒りさえ覚えた。

だから、最初から、そのことに対する非難は全て黙って受けるつもりでいたのに。

「絶対、あれって、うまく化けた自分に酔ってたよな」
「意外……バーロウって、年の割に凄いクールな奴だと思ってたんだけど」
「いや、案外、あれが本性かもよ？　普段からあいつ、ちょっ

とスカしてるからな……ナルシーの要素は絶対あるって」

一度硬直した聴覚は、次々に、カミュにとって聞きたくない言葉ばかりを拾うようになった。

根も葉もない偏見ならば、これほど動じたりはしない。

聞く度に胃の底に氷を飲んだような気分になるのは、気付かされてしまったからだ。

彼等の噂が、事実の一片を含んでいる事に。

この状況を利用しようとした、どうしようもなく狡猾で軟弱な、自分自身に。

「ルーファス、今夜うちの部屋に来ないか？　今度の歴史の授業で、ディベートがあるだろ？　ウォルトが、先に予備ディベートをやって、論理の穴を潰しておくんだって昨日言い出してさ。面白そうだから、僕も乗ることにしたんだけど、ちょっと僕とアンソニーじゃ、ウォルトをやっつけるのは厳しいから……。君ならいい勝負になると思うんだけど」

ラテン語の授業で隣に座っていたポールが、手にしたシャープペンシルの頭でカミュの左手をつついた。その瞬間、雑多な日常音がカミュの聴覚に戻り、カミュは、受けていたはずのラテン語の授業が既に終わっている事に気付いて動揺した。

最近、授業に全然集中出来ていない。先刻も、此処へ来る途中に聞いた一言を思い出していた――からかい半分に、『レディ』と呼んだ上級生の言葉を。

考えても仕方がない。今更、結果は変わらないのだし、それなら次の機会に寮に貢献する事を考えた方がよほど建設的だ……

そう頭では分かっているが、努めて建設的に物事を考えようとするカミュの緊張が途切れた瞬間を狙って、それらはカミュの思考を支配する。

ダンス大会が終わって一週間。

カミュの思考は、閉塞していた。

カミュが所属するこのクラスはセットIと呼ばれ、通常より一年早くGCSE試験を受ける資格を持つ。第五学年終了時に行われるこの試験での負担はなるべく少ない方が良いから、カミュもまたポールと共に今学年終了時にラテン語のGCSEを受けるつもりでいた。

ただでさえ一年早く試験を受けようというのに、授業をまともに聞いていないのでは、満足な成績など望めるはずもない。

「あ……うん。行くよ。僕もウォルトをやり込められるか、そんなに自信はないけど」

気の抜けている自分を内心で叱咤してそう返すと、ポールは嬉しそうに笑った。

「よかった！　ウォルトは先輩とやってもひけをとらないから

なあ……今のところ、殆ど自星なんだよ。僕はひそかに、ルーファスなら勝つ見込みがあると思ってるけど、今のところまだ授業では当たってないだろ？　だから、ちょっと結果を見たい、っていうのもあるんだ」

カミュと同じ大オーケストラでファゴットを吹いているウォルト・パーシーは、色々な場面でカミュと比較される事の多い生徒だった。勿論、カミュの最もよき親友の一人でもある。

ウォルトのディベート能力についてはカミュも注目していたし、いつも感心していた。確かに、殆どの場合、参加者の大多数を納得させるところまで持ち込んでいける強者だ。

だが、一人だけ、そのウォルトが散々手こずった挙げ句、僅差で破れた相手がいた。

ミロ・アーヴィング・フェアファックス。

その回では、誰もが、めまぐるしく変わる切り口、斬新なものの見方に振り回された。そうして、気がつけば、ミロの言に納得している自分自身が居た、というわけだ。

……ウォルトをやり込めたいなら、思考回路が彼に似ている自分ではなくて、ミロの方が適任だろう。

カミュは一瞬そう考えたが、すぐに、その考えを揉み消した。

ミロの側に近づくなど、今の自分には到底耐えられない事だ、と。

側まで行けば、ミロは必ずこちらの瞳をまっすぐに覗き込んで来る。毎日、同じ部屋で、その視線にこちらの心を透かされないようにするのに四苦八苦しているというのに。

「ルーファス？　次は数学だろ？」

「あ……ごめん」

カミュは慌ててノートと教科書をまとめ、小脇にかかえて教室の外へ出た。自然科学系教科の教室が集まるスターリング・ホールは、このカルバン・ホールの裏口を出てすぐの距離にある。

カミュが階段脇を抜けて外に出ようとした時、折しも二階から下りて来たスペイン語選択クラスの学生とはち合わせた。カミュがその事に気付いて緊張に身を固くした時、その声はカミュの頭上から降って来た。

「あ……カミュ！　待って！」

カミュは心の底で溜息をつき、階段の上を振り返った。

本当は逃げ去りたい気分だったが、クラスメートの目の前で恥をかかせるわけにはいかない。

階段の踊り場から、身を乗り出すようにしてこちらを見詰めているミロに。

ミロは、カミュの隣にポールが守るように立っているのを観ると、少しその青い瞳を見開いて開いていた口を噤んだ。しかし、すぐに思い切ったように、再び身を乗り出すとカミュの方に向けて問いかけてきた。

「あのさ、……今晩、次の音楽の課題の曲を決めないか？　シャコンヌは一応もう先生から評価もらったし、まだ学期末までは少し時間があるし……最上級生の追い出しコンパでも何か

やるだろ？」
カミュは一瞬息を飲み、それから、視線の端でこちらを見詰めているボールの姿を捕らえた。
ミロは、何故今この話を持ちかけてきたのだろう？　わざわざ、ボールの見ている目の前で？
カミュは、返答に窮した。答えは既に出ている。先に誘いを受けたボールの方が優先だ。だが、簡単にそう答えさせない何かが、ミロの瞳にはあった。
不安。
不審。
それからおそらく、ほんの少しの、苛立ち。
「……ごめん。今日はもう、約束があるから……」
ミロは、僅かに、眉間に皺を寄せた。それは本人も知らないうちに、つい浮かんでしまった感情だったかも知れない。だが、カミュにこの場にいたたまれない思いをさせるには十分だった。
「……それじゃ、明日は？」
「……オーケストラの練習の後なら」
「うん、わかった。明日、約束な」
語尾の強さに、常のミロらしからぬ押しの強さがあった。カミュは、溜息になりそうな吐息を無理矢理噛み殺し、黙ってミロに手を振ってそのまま建物の外に出た。
「何だか、あまり気が進まなそうだね、ルーファス」
ボールの小さなつぶやきが耳に届き、カミュは今度こそ、深い溜息をついた。

「やっぱ、一位はローズハウスのローラントだな。注文枚数二百枚超えてる。関係のない他の寮の奴まで、面白がって買ってるし……」
スターリング・ホール、地学教室。
授業のない夕刻に、準備室奥で数人の学生が顔を突き合わせていた。
地学の授業では天文写真を撮影し、現像したりもするので、小さいながら暗室が存在する。普段は勿論鍵がかかっているが、写真部の部員達は、学内行事の際に撮影した写真の現像をするので鍵を所持しているのだ。
だが、今日此処に集まっているのは、必ずしも写真部の人間ばかりではない。
実際のところ、写真部部員はたった一人で、残りは各寮の寮長に監督生と、錚々たる顔ぶれだった。
既にロンドン大学への入学希望面接を終えた写真部の最上級生、カート・マークスは、焼き増した写真をテーブルに並べて、高く積み重なった写真の山を指し示した。
「これだ。五年の連中が、焼くのに一晩かかった、と言っていたな。ま、そういっても、二年前の記録には遠く及ばんが」

「ああ、スミス・ハウスのサガ・チェトウィンドだな。あのときは、全校生の半分以上が写真を買ったと専らの噂だったからな……確かに見物だったが」
「あのレベルは二度と拝めだろう?……育ちが違うってやつだ」
「お陰で、最上級生の中から不名誉な不埒者を出した。本人の機転で大事には至らなかったが、あのような事件は断じて阻止せねばならん」
「それで、二位は?」
「ロウ・ハウスのジェームズ。こっちはお笑い系だ」
「成程、ロウ・ハウスの今年の4年生は、結構琵琶青ってるからな」
「三位、ジュディ・ハウスのフィリップ。四位、パーク・ハウスのアレックス」
「ほう?」
「……そして、五位、スミス・ハウスのカミュ・バーロウ。」
　小さな暗室に、沈黙が満ちた。やがて、誰かが、小さく呟いた。
「……意外だな。もっと伸びるかと思ったが」
　誰もが、ふむ、と頷いた。その声は、どこか、安堵の色を含んでいた。
　だが、カートは厳しい表情を崩さず続けた。「安心するのはまだ早い」と。
「実のところ、三位以下はほとんど枚数に差はない。だが、スミス・ハウスは、実はハウス内の購入枚数が極端に少ないんだ。それに、他のペアは十ショットくらいそれぞれ撮っているのに、途中棄権したダグラスとカミュのペアは三枚しかない。つまり、他寮及び上学年からの注文数が多く、しかも、同じ写真を複数枚買ってる奴が結構いるってことだ」
　再び部屋に沈黙が降り、今度は、スミス・ハウスのダグラス・グラハム・コックスが低く唸った。
「……それはつまり、ローラントは勿論だが、カミュにも注意が必要だということか?」
　ダグラスはダンス大会の代表を勤めたが、同時にスミス・ハウスの寮長でもある。
　カートは肩をすくめ、さあな、と返した。
「俺は、ただ、統計について話しているだけだよ。カミュが本当に標的になりそうかどうかは、それこそ相手をしたお前の方がよく分かっているだろう?……ただ、俺は、ファインダーを覗いた時に、これは狙われるかもしれん、と思った。顔も確かに整ってるが、そういう外見以前に……なんというか、妙な色気があるんだよ。お前、何も気付かなかったか?」
　ダグラスは困ったように唸り、組んでいた腕を解いた右手で額を抑えた。
「こっちも緊張していたからな……あまり気にしている余裕はなかったんだ。だが、正直、本番のカミュには驚いたよ。あんなに化けるとは思わなかったし、普段のカミュには軟弱な雰囲気は全くなかったからな。勿論、本番も軟弱では決してなかったが……たしかに、柔らかい雰囲気があったように思う」「写真は嘘をつかないからな。この写真にもそれがちゃんと映ってるよ。……実のところ、俺は、スミス・ハウス内で注文枚

数が少なかった理由はそれじゃないのか、と思ってるくらいだ」

寮長達は、顔を見合わせ、それぞれに複雑な表情で、テーブルの上のカミュの写真を見詰めた。明るい光のもとでこの写真を見た時、すぐには視線を外せない衝撃を受けた事を思い出したのだ。まっすぐに中空を見詰めるその表情に吸い込まれるように写真を見詰め、自分が長くそこに心を奪われていた事に気付いて居心地の悪い思いをする――こんな写真を買ったりしたら、自分にその気があると思われるのではないか、と、スミス・ハウスの面々が躊躇したとしても、不思議はない。

少女のように可愛らしく見えるローラントの写真は、仲間内で囃し立てるには丁度いい。だが、カミュの肖像には、そんな隙が欠片もないのだ。

「……分かった。そういうことなら、この二人を要注意としてマークしよう。同じ寮のダグラスとジャックは特に気を付けてやってくれ。本人にも当分一人で人気のない場所を歩かないよう、通達する必要があるな」

監督生のトニー・マクレガーがそう締めくくり、各寮のトップからなる会合は解散となった。

事件は未然に防ぐ――二年前の教訓に学んだ彼等の対応は決して間違ってはいなかった。だが、残念なことに、事態は既に彼等の手に負えない世界にまで広がっていたのだった。

「ふ…ん……。じゃ、昨夜のリベート合戦、カミュが負けたんだ?」

「そう。それも、滅茶苦茶らしくない投了でね。そこそこの勝負が出来ると思ってたんだが……ミロ、お前も呼んだ方がよかったかな」

ウォルト・パーシーは苛立っていた。

普段どちらかと言えばおっとりとした性格のこのファゴット吹きが苛立つ事は、あまりない。

同室のヴィオラ弾き、アンソニーは、ちらちらとルームメイトを眺めては、小さな溜息を繰り返している。

普段にこやかな人物が眉間にしわを寄せていると、なんとも居心地の悪い空気になるものだ。

「らしくないぜ、あいつ。ここ数日、特にだ。それもこれも、全部下らない連中の噂話のせいだ!」

「ウォルト、気持ちはわかるけど……君がそこで怒っても、事態は変わらないと思うよ?」

「わかってるさ! でも、あんまりだろう?!」

ウォルトは苛々と部屋の中を円を描いて回り、吐き捨てた。

「一体、カミュが何をしたっていうんだ……皆が嫌がっていた事を引き受けてくれて、精一杯頑張っただけじゃないか! それなのに、なんだって他の寮の奴らにオカマよわばりされなくちゃならない?!」

「だから、そんなの、もう放っておくしかないよ……僕らが

騒げば、余計にカミュが嫌な思いをするし……ただでさえカミュは、スミス寮の足を引っ張ったって気にしているんだから……」

苛立つウォルトを懸命に宥めるアンソニーを眺めながら、ミロは胃の中に燃える冷たい炎をまた一つにじり消した。

カミュに対する心ない噂話を、ミロ自身はひとつとして耳にした事がない。言う方も心得ていて、ミロの耳に入れば血を見ずには済まない事を知っているのだろう。

苛立っているのはウォルトばかりではなく、ミロも本当は軽くガラスの一枚や二枚は割れそうなほど怒っている。しかも、ミロの前では決して口にしない狡さに、強烈な怒りを感じる。だが、この件に関して、ミロは決して自分からは手を上げないと、固く誓っていた。

事を荒立てれば、カミュが傷つく……。

毎日、毎晩、手を出さないで欲しい、というカミュの拒絶のオーラを感じるのだ。もう、この件については、何も触れないで欲しい、と。

カミュがこんな目に遭っているのは他ならぬミロの所為だったから、ミロとしては、ただ見守る事しか出来なかった。

たとえ、どんなに歯痒くとも。

「そこもまたおかしいんだよ。この程度のことであんなに落ち込むなんて、カミュらしくないだろう？　精一杯頑張ったんだから、結果は仕方がないって諦める方が、あいつのいつもの思考に近いじゃないか。少なくとも他人にはそういう態度なのに……」

不意に、怒りよりも焦りを含んだウォルトの声が耳を打って、ミロははっと我に返った。

「カミュは自分に厳しいから？……」

「いいや、あいつは甘えてる！　結果を出せなかった自分が許せないんだ。でなきゃ、あんな骨抜きになるものか」

「ウォルト、声が大きいよ」

アンソニーが慌てて扉を振り返り、ミロはその言葉に僅かに眉を顰めた。

ウォルトの苛立ちは、わからないでもない。

ミロの知る限り、カミュは非常に優秀な生徒だった。学業では常に学年で上位成績者に名前が挙がっていたし、運動面でも芸術面でも、同級生から抜きん出ている。そんな彼にもし失敗の経験がないとしたら、ただ一度の失敗から立ち直れずにいると考えてもあながち間違いではないかも知れない。

だが、ミロはそこに同調はしなかった。ゆっくりと首をふって再び上げた顔には、常にない厳しさが浮かんでいた。

「ウォルト、それは違う。カミュを責めても、何も変わらない」

「ミロ……」

「もしお前が言う通りなら、カミュはとっくにそのことを自覚してるさ。『この程度の事』かどうか、オレ達が口を出す事じゃないだろ。……今すべき事は、カミュを追いつめて無理矢理立ち直らせる事じゃない……カミュは、もう十分傷ついているんだ。せめてオレ達くらい味方になってやらなくちゃ、あ

んまりだろう？　今のカミュを見ているのは確かに辛いけど……誰だって、休みたい事はあるし、落ち込んだら復活するのに時間がかかる事もあるよ」

とにかく、今は、一人で考える時間が必要だ……

ミロは、己に言い聞かせるように、その言葉を繰り返した。

一年前の悪夢を思い起こし、ミロは思う。

自分は、周りの視線に気を遣う余裕などなかった。不調ながらもなんとか普通の生活を送っているカミュは、まだ上出来だ、と。

ウォルトは虚をつかれたように黙り込み、それから力なくベッドに腰をおろして両手に額を埋めた。

「……分かってるよ。これは八つ当たりだな。……怪我はともかく、カミュがあんな中傷を受けるのは、俺とポールの所為だ……あんな仮装、させなきゃよかった」

ウォルトは、ポールと共にカミュの衣装の世話をしたのだった。実際のところ、既に基本的なイメージはポールが強く抱いていて、ウォルトのした事と言えば慣れない針仕事を手伝ったくらいだった。

フリルやレースのドレスが主流のこの大会で、思い切りシンプルにしよう、と言い出したのはポールの方だった。

ポールが持ってきた絵葉書の天使の絵を見て、ウォルトはしばしその凛とした美しさに釘付けになった。

モデルは明らかに女性だが、その透き通った空気は確かにカミュに通じるものがある。一度そのイメージが浮かんでしまえば、飾り立てたドレスはむしろ邪魔にさえ思えた。

この勝負、コンセプトの斬新さで貫った、と自信を持って挑んだ衣装合わせで、ウォルトは己の読みの甘さを思い知る事になったのだ。

衣装合わせに現れたカミュは、本気で、女に化けるつもりでいた。

やるからには、無様な姿は見せない、と言い切るその覚悟が、カミュの表情を変え、立ち居振る舞いを変え、取り巻く空気を変えた。

こんなに、綺麗な人は見た事がない……

シンプルな装いなだけに、本人の器量が引き立つ。何をどう研究したのか、いつもより少し柔らかい表情が、目の前の人物が同性である事を忘れさせる。

思わず口を開けて見つめてしまったウォルトに、カミュは淡く微笑み、「君がそういう顔をするのなら、そこそこ成功だな」と笑ったのだった。

「……その時に、これは錯倒する奴がいるかも知れん、と思ってはいたんだ……ここまでやって本当に大丈夫なのかって。でも、カミュもやる気だったし、やっぱり俺達だけで楽しむには勿体なくて……」

「その葉書って……もしかして、Abbott Thayer の？」

「ああ、そう！　それだよ。なんだ、ミロも知ってるのか？」

ミロは、思わず眉を顰め、続いて口に上りかけた言葉を飲み込んだ。

ポールの奴、カミュを、自分の天使に仕立て上げやがった……！

あの日、ミロはポールから呼び出しを受けた。その時、厳しい表情でポールが言い放った言葉を、ミロは鮮烈に覚えている。

『ルーファスに、これ以上負担をかけさせるな。お前のためにどれだけルーファスが自分を犠牲にしているか、考えた事があるのか？』

ミロには、何も返す事が出来なかった。カミュに女役を身代わりで引き受けて欲しいなどと、爪の欠片ほども考えた事はない。だが、現実問題として、カミュはミロが窮地に立つ度に、その間に割って入り緩衝役を引き受けてくれている……

正直、何故カミュがそこまで自分に手を貸してくれるのか、ミロには全く理由が分からなかったが、事実は事実で動かしようもなかった。ポールの非難も的を得ているので、その時は黙って引き上げるしかなかったが、今のカミュの窮状にはポールの下心も一枚噛んでいたと知れば、言いたい事は幾らでもある。

ポールは、大事にしていた天使画の姿をカミュに重ね、本番までの間、疑似恋愛を楽しんでいたのだろう。

そう思うと、急に、この場にいないポールを締め上げてやりたい衝動に駆られた。

カミュは、お前の所有物じゃない……！

「ミロ、どうかしたのか？」

急に不機嫌に黙り込んだミロに、ウォルトが訝しげに尋ねた。

「……いや、いいんだ。こっちの事だから」

ミロは食いしばった歯の間から無理矢理そう押し出すと、壁にかかる時計を見上げ、そろそろ練習の時間だな、と呟いた。今日、オーケストラの練習後、カミュと次の課題の相談をする事になっている。昨日約束した事を、簡単に反古にするような相手ではない――今日こそ、と奮起して練習に赴いたミロは、しかしその期待に反して、深い落胆と、僅かな猜疑心とを同時に抱く事となった。

カミュは、オーケストラの練習にすら現れなかったのだった。

冬が逆戻りしたかのような冷たい北風の吹く中、カミュの姿は、広い学校の敷地内の何処にも見当たらなかった。